



明るい超高齢社会

Super Aging Society Filled with Hope

早稲田 邦夫

Kunio Waseda

EICA 名誉会員

先日、業界団体の会合で、年齢を聞かれ、68歳と応えたら、まだまだ若いと言われてしまった。義母が通っているデイサービスでは80歳代はナイスミドルで、90歳を超えてようやくお年寄りだそうだ。(ちなみに義母は89歳でナイスミドルである。)

国連の報告では65歳以上の人口が21%を超えると超高齢社会と呼ぶ。今、日本は27%であり、2060年には40% (75歳以上は27%)と推計される超高齢社会大国?である。

我等、団塊の世代が80歳を超えるときの高齢者死亡人数は165万人となる。(ちなみに1960年は70万人、2007年は110万人である。)

会社のため、社会のためと24時間働き続けた?(飲み続けた?) 挙句、ご臨終のときは、火葬場のラッシュで一週間以上、待たされそうである。

もっと問題なのが社会保障給付費の急激な上昇である。2000年は約80兆円だったのが、2015年は120兆円、団塊の世代が後期高齢者になる2025年は150兆円へ上昇する。内訳は年金が5割、医療が3割、福祉ほか2割である。この上昇抑制するため、近い将来、年金支給開始年度は70歳以上になり、後期高齢者優遇措置はなくなるのは必然である。当然、定年制度なくなるのである。欧米は既にエイジフリーの時代である。今の仕事がおもしろい人は、加齢能力に応じた範囲で、少々の報酬をもらい、今の仕事を続けるであろう。

そうなれば健康寿命も上がるし、寝たきり老人は減り、ピンピンコロとなり、明るい社会になると思う。何しろ、日本は労働人口不足なのだから、年寄りの有効活用を考えるべきである。

私の住まいはかつての新興住宅街だが、今は、子供たちは出て行って、夫婦二人居住あるいは三人住まいの超高齢社会である。元気で有能な小父さんが庭弄り、散歩、たまにゴルフ、ボランティア、そしてジム通いで時間を費やしている。日本社会としては勿体無いことである。何れは母国へ帰国する外国人に日本の将来を託しても根本的解決にはならない。老人を活用すべきである。アドバンスドジェロンテクノロジー(高齢

者の生活や自立を支援する技術を進化させ、労働提供出来るように支援する技術)を駆使して、老人が、若者と同様の労働力提供が出来る社会環境にしたほうがよい。その基盤こそ、サイバネティクスである。「計測」・「処理」・「制御」それらをつなぐのが情報伝達である。これこそEICA学会の貢献するところである。

話を戻そう。高齢化を加速させるのは出生率の低下が大きな原因である。1990年の「1.57ショック」、2005年の「1.26ショック」と出生率の長期低迷を危惧し少子化対策を打ち出すが、なかなか上がらない。

旭山動物園の園長先生の講演を思い出した。

動物達は、その動物園の環境が子供を産み、育てるのに適しているかを見定めるのだそうだ。だから動物が子供を産んでくれたら、その動物園の環境を受け入れてくれたことであり、環境を整える世話係りとしてホットするのだそうだ。

今の日本の社会環境はどうだろう?かつては貧乏人の子沢山と言われたくらい、貧しくても社会が活性化していた気がする。株主のモラルが落ち、短期利益最優先の会社が多い現代において、会社の経営状況次第で、若い従業員は数ヶ月後に失業するリスクがあれば、とても家族を持たないし、出生率が低迷するのは必然である。多くの若者達は子供を育てたい社会環境が整ってないのを本能的に察しているのではないか。江戸末期の1800年(農耕文明で)の人口は3000万人、明治~平成時代(機械・情報文明で)の人口は2000年で1億2000万人まで急増した。2100年の人口が5000万人まで急減少してもおかしくない。個人各人の本能センサーが、例えば食糧危機を回避するため、増え過ぎ抑制を働かすのかもしれない。

その人口減少時代でも、長寿命化・高齢化・少子化現象は続く。平均寿命100年、120年の時代に、明るく人生を送れる超高齢社会の実現を目指したい。

3年前、大先輩に勧められ、高齢社会エキスパート資格を取得した。勉強して思ったことは、今の高齢者に「隠居」という選択はない。生涯現役で、どこかで社会に貢献すべきである。